ゴシップ

yura

登場人物

沖野重定　（ｵｷﾉ ｼｹﾞｻﾀﾞ）
・沖野相談事務所在住の26歳
・ひょんなことから人の心の内が読めるようになってしまった
・痩せてる方だが、病的なわけではない

登張春仁　（ﾄﾊﾞﾘ ﾊﾙﾋﾄ）
・黒髪で美大に通っている
・自分が人にされて嫌な事を無自覚で人にしてしまうアホ

登張久志　（ﾄﾊﾞﾘ ﾋｻｼ）
・兄のせいで2年もの間、引きこもっている不憫な弟
・無駄にじゃんけんが強い

フミ
・沖野の事務所に通う小学生
・生態は不明・・？

引きこもり事件　その１

今にも崩れ落ちてしまいそうなオンボロビルの中には店がまちまちと並んでいる。どんよりした雰囲気と黴臭さがあたりに広がっていて、店にはいつも閉店セールの紙が貼られていた。いっこうに閉店する気配のない店を通り過ぎ進んでいくと、俺の事務所が見えてくる。
沖野相談事務所と書かれたプレートがぞんざいに貼り付けてあり、サビグリーンのドアは建て付けが悪いのか、開けるのにコツがいた。
広くもない、かといって狭くもない事務所には、机と来客用のソファとせめてもの気持ち程度の花がいけてある。この空間が俺の寝床でもあり仕事場でもあった。
コンビニで買ってきたのり弁をレンジで温めてる間にパソコンを開き、習慣づいた作業に取り掛かると一件のメールがきていた。珍しいこともあるもんだとメールを開くと、タイトルに【弟が引きこもっています】とある。
「引きこもりかよ」
独りごちて本文を読むと、どうやらメールの差出人は登張 春仁という男子大学生。かれこれ2年部屋からでてこない弟への心配と焦り、社会復帰への希望が、国語苦手だろうと思わせるほど延々と綴られていた。
とばしとばし読み進み、やっと最後まで辿り着いたと息をついた。「13時にそちらにうかがいます」と書いてあった。いつの13時かわからず少しだけイラっとしたがレンジの音でそれも消え去る。何事もまずは飯だ。
弁当を食べ終えるタイミングと同時に、廊下を走る音が聞こえてくる。少しずつ事務所に向かって大きくなる足音だと、奴が来る合図だ。少しだけ眉間にシワが寄った。
「シゲサダ！！！」
案の定だ。赤いランドセルを背負った小さな怪物が満面の笑みを浮かべドアを思いっきり開いた。壊れたらどうしてくれよう。
「シゲサダおはよう！」
執拗におはようを繰り返す。「おはよう」と返すだけで奴は上機嫌に拍車がかかる。
「お前学校じゃねーの」
「がっこうだよ！！」
「いま10時を過ぎております、フミさん」
「ここががっこう！」
「帰れクソガキ」
しっしっとわざと邪魔者扱いすると、フミは「やだやだ」と俺のもとまで小走りでやって来た。肩に切り揃えられた髪が無邪気に揺れる。
「シゲサダきょうはえ本よんで」
「えーーー」
「えーーー」
真似すんなと脇をくすぐれば、きゃー！とコロコロ笑った。いやいやと嬉しそうに首を振る拍子に、紫色に変色した皮膚が覗く。またか。溜息をついた。
「フミここ痛い？」
「んー、ちょっと！！」
嘘こけ。胸の内では痛いと訴えてるくせに。
「あっ、シゲサダまたおむねの中みたでしょー！」

「見てない見てない」
「うそつきはドロボのはじまりだってセンセが言ってたよ」
「ドロボーな。ドロボじゃなくて」
小さな手を精一杯伸ばして俺の服を引っ張る。伸びちゃうからなーと適当にあやし、ランドセルを置くとフミの体を抱き上げた。軽くて柔らかい。もう少しだけ力を加えれば簡単に折れてしまいそうな四肢なのに、どこからこのエネルギーは湧いてくるのか。
抱き上げられたことが嬉しいのか、フミは終始ニコニコしていた。急に歌を歌ったかと思えば、次にはクイズが始まっている。まこと不思議な生き物だ。俺もこんなだったのかと思うと少し寂しい気持ちになった。
「シゲサダ、いまおむねみてる？」
「見てないよ」
「なんでシゲサダはおむねがみえるんだろうね〜」
「さあ。俺が知りたいよ」
「フミもおっきくなったらみえるかな」
「見えない方がいいよ」
「なんで？」
「なんでも」
眉を思いっきりしかめ、不満そうな顔をする。
「ひとりじめはよくないよ！」
「あ、絵本読む？」
「よむーー！！」
ランドセルを掴み薄く笑った。ガキは単純で助かる。

もう何度目になるのかわからない絵本の朗読に嫌気が差し、フミを連れて近くにあるコンビニへ向かった。
ビルを出ると道路がすぐ見える。道路を挟んだ向かい側には、少々古ぼけた店が並んでいる。
フミが通っている小学校は、この直線に伸びた道をずっと行けばすぐ着く場所にあり、高層マンションが立ち並んでいた。沖野とは無縁の場所だ。
はっと自分の姿を確認した。この時間帯に小学生を連れた男がうろつくのはまずいだろうか。今更焦り出したが、すぐにどうでもいいかとフミの手を握った。

「何か食いたいもんある？」
「プリンくいたい」
「フミは食いたいじゃなくて食べたいって言いな」
「なんで？」
「お行儀が悪いからです」
なんでなんで？ フミは握っている右手を揺さぶった。つくづく子育ては面倒だと思う。
「ほらフミ。プリン探そう」
上手に見つけられたら買ってやるよ。フミは手を離しコンビニ内を駆けた。

「えー！ じゃあシゲサダもフミと同じ小学生だったの？」
「当たり前じゃん。学校はここじゃないけど」
「・・・足し算できるの？」
「ぶふっ」
できるわ！笑いながらフミの頭をグリグリと押した。
ビルに着き階段を上る。沖野にとってはなんでもない階段でも、フミにとっては障害物だ。時間をかけてゆっくり上った。いつもの閉店セール中の店主は、フミを見るとニコニコして飴をやる。子どもの「ありがとう」は最大の武器だと思わず感心する。子どもは天使だとかいわれているが、まあ多少は頷けると思った。
歩くスピードが遅いので、沖野はフミを抱き上げた。首に手を回し上半身を捻るように抱きついたフミは「たかーい！」と笑う。立てつけの悪い事務所のドアを開けフミを降ろすとすぐさま「もう一回！もう一回！」と強請られた。
「ふざけんな」
買ってきた袋を来客用のテーブルに置き、ふと違和感を感じた。
うおっ！と思わず身を引く。
「あの、沖野さん…でしょうか？」
俺今日の13時にここに来ると連絡したはずなんですけど…。だんだん尻窄まりになる声色でそう言った。若い男がソファに座っていた。
「・・・あ、引きこもりの？」
「はいそうです！」
「登張さんだっけ？ お客さん13時としか書いてなくて、俺も困ってたんですけれど」
「うそ！」
「本当」
ごめんなさい、とすまなそうに頭を下げた。
(こいつ本当に信用していいのか？ しかも子ども連れてるし。すげー自由人っぽい。やっぱやめた方がよかったかも…)
おうおう漏れてやがる。沖野は笑った。そら無理もない話だ。昼間にプラプラ子どもと歩く上、こんなボロいビルに事務所を構えてるくらいだ。世間的には信用できないだろう。
「シゲサダお客さん？」
フミが袋をあさり、プリンを手に取る。何を思ったのか、もうひとつのプリンを登張の前に置

いた。それ俺のだし。
「プリンどーぞ！」
「えっ。あ、ありがとう！」
満足気の顔で登張の隣に座り、沖野にも座れと促す。
「・・・・話はだいたいメールで分かりましたが、俺にどうしてほしいんですか」
座りながら登張の顔を窺った。文面ではアホ丸出しだったが、顔はなかなか賢そうだ。少し長めの黒髪がクルクルと遊んでいる。さぞモテるだろう。
「カウンセラーの人とか呼んでもまったくで、俺や母さんたちも何度も呼びかけてはいるんですけど、それもダメで、」
「はい」
「で、途方に暮れて。ネットあさってたらここに辿りつきました」
「どうも」
(この人冷たくね？ 心折れそう)
突然流れてきたそれに、思わず笑いそうになった。
「ネットに、人の心の内が読めるらしいって書いてあって。正直、半信半疑なんでなんとも言えないんですけど…」
「シゲサダはおむねみえるよ！」
「黙れフミ」
「ぶー」フミは沖野を睨む。
「心が読めるかどうかは、まあ読めるっちゃあ読めるんですけれど、」
登張の目が怪しげに沖野を見る。面倒臭えな。沖野は立ち上がった。
「じゃあ今から登張さん家に行きましょう」
「えっ」
フミも行く！と残りのプリンを急いでかきこみ、ランドセルを背負う。適当なコートを羽織り事務所の鍵を机から取り出すと、登張に出ろと促した。
しっかりとプリンを鞄に入れることは忘れず、登張達は事務所を後にした。